# 小けりつまり

朝倉治彦校

古典文庫

# 小けうつま

朝倉治彦校

古典文庫

古典文庫 第二一一冊 ©

昭和四十年二月二十日 印刷発行 （非売品）

校者 朝倉治彦

発行者 吉田幸一

印刷者 共立印刷株式会社

発行所 東京都王子局区内北区西ヶ原町三ノ三四 古典文庫 振替口座東京一四五九七番 電話（九一九）二七一七番

小さかづき

# 目次

凡例……二
小さかづき　巻一……七
小酒器　巻二……四九
こさかずき　巻三……三一
小盃　巻四……一三五
こさかづき　巻五……一八一
解説
山岡元隣の作品……二三一

# 凡例

一、本書は、山岡元隣作と言はれる未翻刻の仮名草子「小さかづき」を校訂翻刻したものである。

一、本書の底本には、国立国会図書館旧上野図書館本を使用した。但し、最終巻の巻末を欠いてゐるので、その部分は九州大学中村幸彦教授の蔵本を以て補はせて頂いた。いづれも、初板本ではないが、初板本が見つからないので、止むなく後印本を使用した。

一、翻刻にあたつては、できるだけ原本の面目を保つべくつとめたが、その方針は概ね次の如くである。

イ、文字は通行の文字に改めた。

ロ、誤字、脱字、仮名遣ひの誤りなども原本通りとし、（マヽ）或は（…カ）と傍註した。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ハ、原本の句読点は白丸の。と、黒丸の・とが混用されているが、これもそのまゝにして私意を以て統一しなかつた。全く句読点のない丁は、適当に空間を設けて読みやすからしめた。これらは、初板本と比較すれば自から明らかになるであらう。

二、原本に施されてある振仮名は、読み誤りのおそれあるものゝ外は、省いた。

ホ、和歌は、別行、二字下げに統一した。

ヘ、原本には、各章中、行を改めることは一切してないが、私に別行を多く作つた。文章の切れてないところで、改行にした箇所もある。

ト、丁移りは」を以て示し、丁数、表裏を註した。挿絵は〔第一図（片面）〕の如く示し、丁数、表裏を註すること同様である。

一、巻末に、元隣の作品についての簡略なる解題を附した。

一、御所蔵本をお貸し下され、またその使用をお許し下された中村幸彦氏に深く感謝申しあげる

榎坂浩尚氏の元隣年譜から蒙つた恩恵は極めて多大なもので、氏の学恩に謝意を表したい。その年譜を御恵与下さつた野村貴次氏には季吟関係、文献の所在などわづらはしたことは殊の外であつた。

宗政五十緒氏には、御多忙中のところ、京都大学文学部図書室本につきねんごろなる御配慮を賜つた。小松操君は増補鉄槌につき種々教示を惜しまれなかつた。

一、多くの図書館、文庫は関係文献の閲覧につき多大の便宜をはかつて下された。鳴謝する。

昭和三十八年六月

朝倉治彦

# 小さかづき

おもしろし　おもしろし　この草子・誰人の作為ぞや・世間人情の上を滑稽に述て・頗日用の工夫を明せり寓言有・重言有・巵言有・書林予に名を求む・一部の意につきて・小さかづきと名づく

世の人のなさけくゝしる小巵下戸も上戸ももてあそふべし　ノ一オ

一目録

第一　夢物がたりの事
第二　道理と理屈の事
第三　元亨の饑饉の事
第四　相レ人失レ貧事　付古休茶入見あやまる事
第五　足事をしらざる事　付蛙の願だての事
第六　信心者門跡をほむる事
第七　文盲なる人龍虎の絵を見る事
第八　自レ小視レ大不レ盡自レ大視レ小不レ詳事　」一ウ

## 第一　夢物がたりの事

いきとしいけるものも、すへの、世となりてハ、私欲を、もつはらとし、あらそひがちに、なり侍るにや、

さんぬる、きさらきの空の気色もえんにして、かすゝわたれる、夕づかたに、らんかんに、よりそひ、庭の面(おも)をながめをりしに、そこはかとなく、ねふりきざしければ、其まゝそにこ、肱(ひぢ)をまくらとし、無何(ぶか)有(いう)のさまに、おもむき、天地を、わすれ、かたちをわすれ、こゝろをわすれ、気をわすれてのち、ゆめともわかず、うつゝともわかざるに、

外面(そとも)の、梅の木に、一つの、うぐひす、とび来りて、巣つくらんとし



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

けるに、また一つの雀、きたりて、此木はわが折〳〵。いこふ所なれば、巣をかけさせしと、いなひて、とかくあらそひ、わかざりければ、

鶯か云、その方と、こゝにて、」二オ はてもなきことを、いはむより、いざとよ、鳳凰は、羽虫三百六十の長にして、天性の聖徳、そなはれりといへは、さだめて、りひ、ふんゝやうなるべし、其まへにゆきて、事の沙汰を、うけ給るへきと、いへるに、雀も、もつともと、同ける、

うぐひす、またいへるやう、たとひ鳳凰のまへに、まかりて、其はんだんを、うくるとも其方と、われのゝにては、立かへりとかく、あらそひ、出くれば、いれづら事と、なりぬべし、此やどの、あるじを、

いざなひ。ほうわうの仰を。もろともに。きかしめ。のちのしるしに。そなへんとて。二つのとり。まくらのほとりに。きたりて。かのあらましをかたり。たゞいま。九宵の天にのぼり。聖鳥のまへに。うつたへ侍れば。あるじも。来りて。此事を聞をき給へと。云ければ。あるじの云。いとやすきことなれども。われ」二ウ 鳥にあらざれば。そらを。かける事。かたしと侍れば。二鳥が云。形こそ空をかける事。かなハずとも。心を羽化登仙の術にならひて。しばらく。われとともにせよと。いひければ。夢中に。とびたつ心ちして。九万里のそらに。のぼりける。

ほうわうの。捿所とおぼしくて。たまの梢葉をならべ。こがねの木花をつらねたる。はやしあり。二鳥にしたがひて。やうやくそのうち

へ。入ことありしに。その高十丈ばかりなる。桐の木の枝に。けたかき鳥。捿て其下に。萬鳥列座せり。二鳥地に控て。其ミぎりにいたり。さゆうにわかれて。尾をすべ。羽をたれて。是はこれ。人間世の小鳥なり。かりそめに。一枝の梅花をろんじ。はづかしくも。聖鳥の御園に。朝し侍れば。あハれ片言の下に。訟を折たまへかし。二鳥亡」三オ

後のかくごを。きはめたく。侍ると申あげければ。

其とき。鸚鵡とおぼしき鳥。とび出て申けるハ。かたしけなくも。あれにましまし。聖鳥は。つねに。千仭にかけつて。徳輝を見てはくだり。細徳の険微なるをミてハ。はるかに。ハうつ事をまして。此所に濁世を。のがれて。すゝ給へば。今もつて。獄訟の沙汰。聖判あるへきにも。あらざれとも。二鳥はる〳〵是まで。朝せられしうへは。ほ

いなく。かへすへきにも。あらされば。両鳥ともに。其けいづを。申あげらるへし。其よろしき方につきて。梅花をしゆれうせさせ。侍るべしといへば。

まつ鶯がいへるやう。むかしやまとのくに。高天寺にて。すなハち此梅花を。やどゝして。初陽毎朝来不相懸本栖。

はつはるの。あしたごとにはきたれども。あハでぞか」三ウ

〔第一図（片面）〕」四オ

へるもとのすゝかに

と。いへる名哥を。さへづりてより。古今の序にも。はなになく鶯。水にすむ。蛙の哥よめること。のせられしといへば。

雀申やう。それがし。勧学院のかたハらに。蒙求を勤学せしおりし

も。この事も承候。かの貫之の。はなになく鶯水にすむ蛙と。出されしは。あながち高天寺の。詠吟あるゆへにあらず。有情のなくこゑ。たゞそのまゝの哥なりといへるこゝろにぞ侍れ。其ゆへに生としいけるもの。いづれか哥を。よまざりけるとハ決し侍り。わが雛こそ。よにやん事なきものにて。紫の上。おさなき御時。北山にしのびて。すゝ給ひし折も。てうあいせさせ給ふ事。源氏物がたりに。見へ侍るといへば。

鶯また曰。大学の傳にも。詩云緡蛮黄鳥止」四ウ　于丘隅上

子曰於止知其所止可以人而不如鳥乎

といへり。緡蛮は。われらがこゑ。黄鳥は。われらが異名。丘隅は。はへしげりたる。こだかきゝねの。ゑさしも。かよハぬ。地なれば。

是鳥のための・至善の地也・鳥だにその。丘隅をしりて。とゞまれば・人として・至善に。とゞまらざるは。鳥におとり侍るよし。孔子も。のたまひ侍れば。百になりても。おどりわすれぬ。雀どのゝ愚痴なるたぐいにはあらずと。云ば。

雀きいて云。一言已に出て駟馬も。およばず。とこそ侍るに。よもはバかられぬ。おどしめやうかな。われらこそ。知仁勇の。三徳をそなへ侍れ其ゆへは。諸鳥にかハりて。おとりに。たぶらかされぬは。知にあらずや。群禽に。すぐれて。子をなつかしむるゆへに。我巣に。生せざる雛にても。たま〳〵人」五オのために。とらハれて。かごにこめらるゝ時は。われかならず。ゑばゝをもつて。是をかごのほとりに。はごくむは。これ仁にあらずして。なんぞや古語に云。闘雀人



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com